巻頭言

子育てを野球に例えて、子育て支援を考える

福井（ふくい）　聖子（まさこ）

少子化・核家族化の中、子育て支援の必要性が認識されてきたが、何をどう支援すればいいのか疑問の声もある。子育てを野球に例えて、支援を考えてみよう。

１人の子育てそのものが１試合とすれば、子育てにかかわる人を選手に例えると…。緊張感の高い１－３回は乳幼児期、比較的落ち着く４－６回は小学生、７回のヤマ場は思春期、就職・結婚が９回である。役割分担を守備の選手に例えてみよう。子育てで親の重みが大きいように、野球はピッチャーとキャッチャーが要だ。本来両親が適宜交代して投げるべきものだが、長時間労働の父親がバッテリーを組むのは難しく試合の大半が母親一人に任される。昔は親戚や近所が内野を守り、時にリリーフとして子どもを見てくれた。また間近で子の育ちにかかわった人が親代わりに、つまり内野経験者がピッチャーになったのだが、今は未経験者がいきなりマウンドに立つ。しかも内野にはほとんど人がいない。投げるだけで必死の新米なのに全部三振を取らないといけない気分になる。子育てでは、病気やケガ、もめごとなどさまざまな問題が起こる。毎日の養育が投球なら、いろいろと起こる問題は「打たれた！」という感じである。守るか取り返せばいいのだが、やはりうろたえる。

全く同じ試合はないようにピッチャーの投げ方は一人ひとり異なり、試合が進みヤマ場を越すようになってだんだんわかってくる。投げ方、すなわち「親の育て方」を評論家のように問われても、多くの情報や他人のすばらしい投球を示されてもうまく投げられない。下手だからとすべて誰かに引き受けてもらっても投げ方は身につかない。肩の力を抜いてその人らしく投げられるように、時にはリリーフ、時には一緒に考える内野守備、そして医療や相談機関などの専門職が外野守備と、いろいろな人がかかわりたい。野球（子育て）は楽ではないけれど、楽しいものである。

■プロフィール　1955年大阪府生まれ。医学博士。大阪人間科学大学非常勤講師。小児科医として10年間の診療や研究生活の後、結婚。３児の子育てで休職中に子育て支援にかかわる。ボランティアグループ「小さな手」代表。大阪小児科医会PC部会委員。論文に、「子どもが病気のとき家庭でどうする？」（小児保健研究）、「子育てサークルの課題の検討と支援についての考察」（子ども家庭福祉学）など。